

コレット『牝猫』における サハの役割

— 《pur》に注目して

山田志生 博士課程前期 1 年

はじめに

シドニー＝ガブリエル・コレットの『牝猫』*La Chatte* (1933) は一般に、青年アランと新妻のカミーユ、そして彼の愛猫サハ¹⁾との三角関係を描いた小説として読まれている。この新婚夫婦と一匹の猫の関係が三角関係と呼ばれる原因は、サハに対するアランの感情がペットに対する愛情と同時に人間の女に抱くような性的欲望を含んでいるように思われるからである。では、この小説の中でアランにとってのサハという存在はどのような役割を果たしているのだろうか。また同時に、アランにとって大きな意味を持つ《pur》とは何かという問いに答えることが本論文の目的である。

カミーユはアランが自分を十分に愛していないと感じて嘆く。その言葉を受けて、アランはサハに嫉妬しているのかと尋ねるのだが、それに対するカミーユの返答を以下に引用する。

「もちろんそうよ。あなたはあの猫みたいに愛したりはしないでしょうからね。」と彼女はとても素早く答えた。(省略)「女でさえそうよ。たとえ女であっても、おそらくあなたはあれと同じようには愛さないでしょうね。」と熱くなってカミーユは続けた。(省略)「あなたは動物好きな他の人たちとは違うのよ、あなたは…。(省略)あなたは別物なのよ。あなたはサハを愛しているんだわ…」²⁾

カミーユは、飼い猫サハを夫から愛される対象として、女として「ライバル」であるとはっきりと自覚している。しかしそれは本来なら精神的においてのみ相思相愛なのであって、物質的な心配は必要ない。異なる「種」同士の彼らが肉体関係を結ぶことは不可能であるからだ。ところがカミーユは、アランが自分を寝室に残して長椅子へ移動し、そこでサハと眠る姿を発見するとまたしても過剰に反応する。

彼女は叫んだ。「わたしあなたたちを見たのよ！朝、陽が昇るまで、あなたが小さな長椅子で夜を過ごしている時…わたしあなたたちを見

たのよ、あなたたちふたりが…」³⁾

はじめのうちはアランに対してのみ発せられていた言葉は、次第に「ふたり」という呼びかけに表れるようにアランとサハの両者に向けられていく。まるで夫の浮気現場を目撃したかのようなのである。そして彼女はテラスに向かって震える腕を伸ばし、こう続けるのだ。

「座って、ふたりが…あなたたち、わたしに気が付きもしなかったでしょう！あなたたちはこんな風にしていたわ、頬と頬をくっつけて…」⁴⁾

彼女の嫉妬は、サハが過剰に可愛がられている事実に対してだけでなく、本来妻である自分に向けられるはずの快樂⁵⁾が猫との間で行われるかもしれないという可能性にも向けられているのだ。精神的かつ肉体的に妻としての立場が奪われるのではないかという危惧によって、カミーユは猫の殺害未遂にまで踏み込んでしまうのである。

ところが、アランによればカミーユとサハは「ライバルなわけではない⁶⁾」という。ではアランにとってサハの存在とは何だろうか。彼が猫全般を偏愛するマニャックな男なのか、あるいはカミーユの言及するように「サハ」が特別なのか。アランのサハへの描写には人間の女性を捉えるような官能的な視点が含まれるように感じられる一方で、非常に動物的な強調が用いられる。人間と猫という異なる「種」が入り組み、その境界が限りなく曖昧なのである。この「種」を自由に行き来するような曖昧さは、作家コレットの特徴を十分に表すものであり、このことに注目しながらアランにとってのサハとカミーユの差について読解を行っていく次第である。

I、《l'état de nudité》の捉え方

(1) 肖像写真として飾られるカミーユ

アランが生まれ育ったヌイイーの家は彼にとって誰にも侵されたことの

ない拠点⁷⁾であり、庭の存在や4歳から7歳の間に身につけた朝食の食べ方の習慣に表れるように、そこはまさに「特権を受けた子供の領域⁸⁾」である。そのような特別な空間にあるアランの部屋もまた、「彼の真の秘密が眠っている箱であるいくつかの引き出し⁹⁾」という小道具からわかるように、彼の幼少時代を昔のままとっておける唯一の場所なのだ。

ところで、アランにとって重要な意味を持つ部屋¹⁰⁾の壁にはカミーユの肖像写真が飾られている。

彼はクロームメッキした鋼鉄にはめ込まれた写真の方へふり向いた。それは髪の上に大きな鏡付髪飾りをのせ、黒いインクがガラス化した七宝のような口をして、睫毛の二つの柵のあいだにある大きな目を輝かせているカミーユの写真だった。「本職の見事な出来ばえだ。」とアランはつぶやいた。彼は自分の部屋のためにカミーユにも、そしてほかのだれにも似ていないこの写真を、自分自身で選んだことをもう忘れていたのだった。¹¹⁾

このよく作りこまれた肖像写真に対して彼は、実物のカミーユは全然異なっていて、もっと繊細で優しきがあると感じていた。しかし、結婚後ふたりで住んでいたキャール・ド・ブリーから逃げ出し、4ヵ月ぶりに実家に帰ってきたアランは「僕が思っていたよりもずっとよく似ている¹²⁾」とまったく逆の感想を抱くのである。

アランはカミーユに結婚した初夜から「裸でいることは自然でいることで、望ましいことであり、気分を奮い立たせ、そして都合の良いことである¹³⁾」と教えるのだが、彼女は充分すぎるほどに理解する。そしてカミーユが従順に《nudité》を見せつけると、彼はそれを受け入れられない。この理想と現実の矛盾が彼の中に拒否反応を生じさせ、その感情が見え方の相違として現れたのではないだろうか。

さらにキャール・ド・ブリーで一夜を明かし、一条もまとわずに部屋を歩き回るカミーユを見たアランは、彼女を厚かましいと感じる。¹⁴⁾

「彼女は庶民的な背中をしている…（省略）彼女は家政婦の背中をしている…（省略）いや、そんなことはない。彼女は美しい。それにしてもなんて…なんて厚かましいんだろう！僕を死んでいるとでも思っているのかな？あるいは、何も身に着けずに裸でぶらつくのを自然なことだと思っているのかな？だがいつまでもあのままではないだろう…¹⁵⁾」

これまで隠されていた、あるいは想像上のものでしかなかった《nudité》が共に暮らすことですっかり現実に露呈されてしまうと、それは美しさを超え、アランは受け入れられなくなる。身も心も裸でいることは、動物であるサハには許されるが、妻という立場にある人間の女には許されないのである。

（2）眺める対象としてのカミーユ

アランはカミーユの皺のない幹や幾重にも包まれた筋肉の束、そういったような感じの頸の根本や煙草の煙を吐き出す鼻孔¹⁶⁾をこのうえなく美しいと感じている。これ以外にも小説を通してカミーユの肉体の美しさへの驚きと尊敬を示す描写が幾度も繰り返されることから読み取ることができる。しかし彼女がアランのブロンド色の肉体の匂いを野生的に嗅ぎ求める¹⁷⁾と、たちまちアランはうんざりしてしまう。彼女が彼を本能のままに欲すると、それまで魅力的に映っていたカミーユの肉体は嫌悪へと変化するのだ。このカミーユの身体に対する魅了と嫌悪は、常に彼の中に存在し反発しあっている。

このことから客観的に彼女を眺めるとき、つまり視覚によって捉えるときにのみ彼女は美しい存在でいることができる。しかし、実際に触覚や味覚、嗅覚を用いて直接的に肉体を感じる時には、肉体という物質の美しさよりも、《nudité》という状態に対する厚かましさが際立ってしまうのだ。

このことからこの猫のように神経質な男¹⁸⁾にとって、カミーユはある一定の距離を保ちながら「見る」という行為に最もふさわしい存在であり、まさに肖像的な役割を果たしているのではないだろうか。

Ⅱ、「種」と「性」について

(1) 二種類の「種」

「白状したっていいじゃないの、あたしの恋敵に逢いにゆくって！」

「サハは君の恋敵なんかじゃないよ」とアランはそれだけしか言わなかった。そして《どうしてサハが君の恋敵である筈があるんだ?》と彼は心のなかでそのあとを続けた。《不純なもののなかになら、君が恋敵を見出すのは道理にあってるかもしれないが…¹⁹⁾》

序章で指摘したようにカミーユとサハが「ライバル」になりえないのは、アランが決して口には出さないが自身のなかで彼女を「不純なもの」に、サハを「純粋なもの」に属するとみなすからである。その一人の女と一匹の猫は純粋さという点で「種」が異なるのだ。

しかし、この「種」の分類は女に対してのみ行われるものではない。カミーユとサハの間に存在する「種」の違いを明確にすることで、アランは自分がサハ側の「種」であることを自覚し、それによってそもそも自分とカミーユの間にも違いがあることを示している。

その違いは彼らの生い立ちや性質に顕著に表れる。例えば、脱水機と洗濯機の製造販売で財を成した、いわゆる成り上がりの家庭に生まれたカミーユは非人間的な空間であるアパートマン、つまりキャール・ド・ブリーを好む。それに対してアランは絹織物を生業とする古くから続く家系の子で、大きな庭のある広大な家に住み、そこに自分の子供時代のすべてを託している。

さらに時代的特徴を考えるとすれば、カミーユは若い娘の典型ともいえる現代的な女性である。²⁰⁾ その一方で、アランは《comme hors du temps²¹⁾》な男、つまりその時代の型にはまらない、まるで時空を超越しているかのように描かれているのである。つまり、アランとカミーユは生物上同じ人間であっても、異なる「種」であるのだ。

(2) 「pur 純粹である」とは何か

六月の終わりごろになると、アランとカミーユの間に驚きはあるものの両者が納得のいくような、和解できないような状態が生じる。²²⁾ では、この「しっくりいかない状況」を生み出した要因と考えられる「純粹であること」という観念は、単純に「種」の対立に起因するものなのだろうか。プレイヤッド版の中で『牝猫』の生成過程について執筆したミシェル・メルシエは以下のように言及している。

ラシルドが構成する「この取り決めによる美しいカップル」をコレットが取り上げるのは解体するためである。つまり「種の反目」ではなく、性の反目を示すためである。²³⁾

コレットの『牝猫』における対立は性によるもの、つまり男女間の対立であって、そして彼女はその対立をより根本的であるとみなすのである。

さらに、そもそもこの「pur 純粹である」とは何か、そしてコレットが《pur》に対してどのような立場を取っているのか、については次の文章が参考になる。

従って『牝猫』にはコレットの存在に最も深く触れていて、そしてコレット自身もはっきりとは定義できないであろうが彼女にとって不可欠なこの言葉に属する何かがある。それが《pur》である。²⁴⁾

つまり、《pur》とはコレットを考察するうえで重要な概念であることがわかる。しかし、それと同時に彼女自身も《pur》が一体何を示すのかを明確には理解していないのだ。そのことと同様に、作品の中でアランもカミーユに対する嫌悪を心の中で訴えたとしても、《pur》それ自体を語ることは決してない。それどころかカミーユとサハを区別するものは、アランの中に秘められる《pur》という視点であって、それを除けば限りなく曖昧である。サハが人間的に語られるのと同じように、カミーユもまた獣のように野性的に描写されるのだ。つまり、その複雑な交錯を隔てるのは

《pur》なのだ。まるでコレットがアランという青年を通して《pur》に対する問いかけを行っているかのようなのである。

Ⅲ、純粋なものと不純なもの

コレットは1932年に『純粋なものと不純なもの』*Le pur et L'impur*という作品を出版している。これはコレットの女性同性愛に関する考えを総括するように描いたといわれるが、彼女は作中でこの作品を「快樂について語る本²⁵⁾」とも呼んでいる。そして、この作品の最後を締めくくる語り手の台詞によって《pur》という言葉について語っている。

彼女の口から落ちたこの pur という言葉から私は短い震え p と、嘆くような u、澄み切った氷のような r を聞いた。目に見えない水に通じ、流れ出るはっきりしないしずくの彼女のこだま、つまり pur という独特な響きをもう一度聞くという欲求を除いては、それは私の中になにも呼び覚まさなかったのだ。《pur》という音としての言葉は、その理解可能な意味を私に開示してはくれなかった。わたしは、厚い水晶のただ中の、手の届かない、削除された想像上の景色と水の塊、そして泡の中というそれを想起させる透明の中にある純粋という視覚の渴きをこぼれないようにしているのである。²⁶⁾

この主人公もまた《pur》という言葉がどのような意味を持つのか、さらにはなぜ自分がその言葉に惹かれるのかすらわからないが、それに対する憧れを抱いている。それにもかかわらず、その気持ちを「分厚い水晶」の中に閉じ込めなければならないのは、《pur》とは生命の源に隠されている秘密に対する直観、あるいは予感させるものであって、その要求の中で人は《pur》に近づくことしかできないからだ。²⁷⁾ つまり、人は《pur》を完全に手に入れることは不可能な存在で、そこへ向かっていくことしか許されないことを意味しているのではないだろうか。したがってこの主人公も同様に《pur》に触れたいという欲求を抱えながらも、それを実現するこ

とは不可能なのだ。

この女性同性愛を扱う『純粹なものと不純なもの』と、『牝猫』はどちらも男女の異性愛が成立しない作品であるが、この《pur》という共通点はコレットにとって重要な問題であったといえるのではないだろうか。

結論に代えて

『牝猫』は「新婚の若いカップル」と「アパルトマン」という柱に、題名の通りサハという「牝猫」が挿入されることによって、「種の反目」を描いた作品として読まれてきた。しかし、コレットという作家の作品全体を通して眺めたときに浮かび上がるのは「性」への意識である。コレットは「性」による対立を最も根源的であると考え、その問題を考える際に《pur》という観念を重要視するのである。アランの《pur》に対する興味はコレット自身の興味であり、アランはコレットの代弁者として読むことができるだろう。

コレットの描く性において、身体に与えられた物質的な性と精神的な性は必ずしも一致するわけではない。それは同性愛というテーマに顕著に表れているが、『牝猫』のカミーユも同様である。彼女が煙草を吸い、クルマを運転し、短い髪と男の子のような名前を持つ様は、ボーイッシュな女性の登場を表す「新しい女性」と受け取ることもできるが、単純に性の曖昧さを帯びているともいえる。コレットの描く性は、身体と精神、そして他者との間で非常に曖昧なのである。

したがって、『牝猫』の中でサハはカミーユとの相違を示すものではなく、間接的にアランとカミーユの間に存在する男女間の対立を提示し、アラン自身にそのことを自覚させるきっかけとしての役割を果たしている。

これまでコレットは、女性の社会進出、あるいは女性の性への開放を描く作家として扱われてきた。しかし彼女の性に対する考えは、身体と精神の間でより複雑に絡み合っているのではないだろうか。

「女たちよ。女たちだけが、わたしたちの精神的男らしさで傷つけら

れもせず、欺かれもしないのかわ。²⁸⁾」

これは『純粹なものと不純なもの』の中の、語り手の友人であるマルグリット・モレノの言葉である。女は精神に男の性質をも含んでいる。しかしそのことを受け入れられるのは女だけであり、男は女のそのような性質を拒否するのだというのが彼女の主張である。このことがアランとカミーユの間に同様に起こっていると考えるとき、カミーユを「男を必要としない女」として読むこともできる。このコレットの性に対する意識は、『牝猫』を性の対立から女の両性具有性²⁹⁾ というより深い段階へ発展させる可能性を提示しているのではないだろうか。

注

本論における『牝猫』、『純粹なものと不純なもの』のテキストは、1984年から2001年にわたって刊行されたプレイヤッド版の第三巻に収録される *La chatte* と *Le pur et l'impur* を使用した。邦訳については、前者は川口博訳（新潮文庫、1954年）と工藤庸子訳（岩波文庫1988年）、後者は倉田清訳（二見書房、1972年）を参照しつつ、筆者が作成したものである。

1) Œuvres 3/ Colette; édition publiée sous la direction de Claude Pichois, 1984-2001, p.815. フランス語において多くの h は発音されないため、通常 Saha という名前を日本語表記に変換する場合には「サア」が適しているだろう。しかしアランは牝猫に対して、「h を強く発音する有音の h で、小声で呼びかけというある方法」を用いる。その響きは、牝猫をうっとりとした興奮状態に変えてしまう力を持っている。その独特さを生かすために本論文では「サハ」と表記するのが良いと考えた。

2) *Ibid.* p.875.

3) *Ibid.* p.876.

4) *Ibid.* p.876.

5) 快樂もまた、コレットにとって重要なテーマである。*Le pur et l'impur* というタイトルは後になってコレットによって変更されたもので、改題前にはそれが *Ces plaisirs* であったことから伺える。

6) *Ibid.* p.832.

- 7) *Ibid.* p.854.
- 8) *Ibid.* p.821.
- 9) *Ibid.* p.816.
- 10) *Ibid.* p.845. アランの部屋に対する思いは非常に激しく、誰もそれを飾ったり、あるいは醜くすることはできない。つまり、カミーユの肖像写真もまた彼の意志によって選ばれ、飾られているといえるだろう。
- 11) *Ibid.* p.820. le portrait という語は肖像画の意味も持ち合わせるが、のちに cette photographie と言及されることからここでは肖像写真であることがわかる。このふたつの違いはアランの心情に対する読解において大きな意味を持つだろう。なぜなら、もしこれが肖像画であれば画家の裁量によって実物に似つかない絵に仕上げることも可能である。しかし写真の場合には多少手を加えることはできても、別人に思えるほど過度な修正を行うことは難しいからである。
- 12) *Ibid.* p.882.
- 13) *Ibid.* p.1630.
- 14) *Ibid.* p.827.
- 15) *Ibid.* p.828. カミーユの背中を形容する単語 *peuple* は「大衆的、庶民的」の他に、「粗野な、下品な」という意味も持ち合わせている。アランは彼女の人間としての根本的な性質をも指摘しなかったのではないだろうか。
- 16) *Ibid.* p.858.
- 17) *Ibid.* p.827.
- 18) *Ibid.* p.858.
- 19) *Ibid.* p.832.
- 20) 本論の『結論に代えて』で述べるようにカミーユは当時流行した社会の中の「新しい女性」である。彼女自身がアランに対して「あなたはまるで1830年型ね」(*Ibid.* p. 850.) と指摘していることから、ふたりの間にある意識の違いは明確であり、少なくともカミーユはそれを自覚していると言えるだろう。
- 21) *Ibid.* p.1631.
- 22) *Ibid.* p.847.
- 23) *Ibid.* p.1632. Michel Mercier による、*Genèse : Le pur et l'impur* を主に参照した。
- 24) *Ibid.* p.1633.
- 25) コレット、倉田清訳『純粋なものと不純なもの』、1972、二見書房、p.183.
- 26) (*Euvres* 3, 1984-2001, p.653.
- 27) *Ibid.* p.1634.

- 27) コレット、倉田清訳、前掲書、p.208.
28) 小野ゆり子氏は、コレットの男女関係と女性同士の関係性の交差について述べた著作『娘と女の間』の中で、コレットの描く女性の両性具有性について指摘している。

参考文献

- Colette, *La chatte*, (Œuvres 3 : édition publiée sous la direction de Claude Pichois, 1933, Paris
— *Le pur et l'impur*, Ibid, 1932
エレーヌ・シクスー他『セクシュアリティ』、2012、別冊水声通信
コレット、川口博訳『牝猫』、1954、新潮文庫
— 倉田清訳『純粋なものと不純なもの』、1972、二見書房
— 工藤庸子訳『牝猫』、1988、岩波文庫
バルザック、片桐祐訳『砂漠の情熱』、「バルザック幻想・奇怪小説選集3」、2007、水声社
小野ゆり子『娘と女の間』、1988、中央大学出版部
— 「コレットにおけるレズビアニズム」、『中大仏文研究』24号、1992、101-135頁
— 「コレットにおける両性具有性と“ジャンル”の問題」、『中大仏文研究』24号、1992、85-99頁
堀江珠喜『猫の比較文学 猫と女とマゾヒスト』、1996、ミネルヴァ書房
村上舞「コレット『夜明け』における母の教えと動物の教え」、『西南学院大学大学院文学研究論集』33巻、2014、49-67頁
横川晶子「コレットとベル・エポック—レズビアニズムをめぐる—」、『学習院大学人文科学論集』6巻、1997、181-199頁
吉川佳英子「性差と種の違いを越えて—ブルーストとコレット—」、『女性空間』28巻、2011、122-136頁
— 「ブルーストとコレット—ジェンダーをめぐる—」、『年報フランス研究』43巻、2009、53-65頁
— 「『失われた時を求めて』の中の女性同性愛をめぐる—コレットの作品中のレズビアニズムを手がかりに—」、57-69頁